



永井隆
壽大



地元徳三
岡本正巳



秋月辰一郎
岡部大吾



古江修一
森本克巳



吉持東吾
いわいのふ健



西浦キネ・修道女
妹尾江身子



松浦渴の世間を控
今井徳太郎



藤市のマリア・千代
患右手愛美

「長崎の鐘」の鬼気迫る異様な迫力

岡部耕大の新作「長崎の鐘」の異様な迫力に、心打たれている。もとより、氏の作品はこれまででも常に劇的緊迫と人間的慈悲を湛え、観客の胸を打ってきたのだが、この新作の台本を読みながら、作者のただならぬ志をしきりに感じずにはいられなかった。

本作の主人公、永井隆のヒューマンな在りようはかつて映画になり、歌になって、日本中を風靡した。「長崎の鐘」(1950年製作)、「この子を残して」(83年)などの映画作品があるが、余談ながら「この子を残して」の木下恵介監督は以前、海外メディアに、「広島長崎の原爆投下に感想を求められて「仕方がない」と(昨年の久間章生前防衛相の「しようがない」みたいに)発言。その軽はずみな言葉を悔いて、この題材を取り上げたのでは、とも言われている。

今、つい「題材」と書いたが、岡部耕大「長崎の鐘」は題材というよりな他者性のものでなく、死者になり代り(と言わんばかりに)、原爆投下の理不尽さ、人と街の被害を目に見えるような鬼気迫る言葉で吐き出していく。永井のカトシリズムと、秋月辰一郎の浄土真宗の双方から生死(しじ)観も持ち出されるが、といって、「重い」だけの劇では決してない。「永井先生は楽屋に放り出された浄瑠璃人形のごとくくたくたになるまで働きよらすとよ」という台詞があるが、ユーモアを含みだけでなく、長崎弁による台詞の応酬は浄瑠璃の修辞のようにリズムカルで、カタルシスをもたらしてくれるはずである。

そして歌謡曲「長崎の鐘」への敬意が私を驚かせた。この爛々たる大衆的な曲を讃美歌と同格とする氏の柔らかな感性。因みに作曲者の古関裕而、岡部氏の師匠・岡本喜八の墓が「春秋苑」(浄土真宗本願寺派)にあり、岡部宅のご近所なのである。岡部氏の魂はいつも死者とともにあると思われる。

浦崎浩實(劇評・映画批評)

「長崎の鐘」あらずじ

この物語は昭和20年8月8日の「永井隆」の家から始まります。幸せな家庭、質素な妻緑とのユーモア溢れる会話。研究室の女の子が「先生は昼間も奥さまから抱かれていますのね」といったエピソードを「元寇」の地鷹島生まれの徳三とサチに語る永井隆。家族の衣類はみな妻の手製だった。永井隆の靴下からワイシャツ、オーバーに至るまで、妻がこつこつ丹念に仕立てたものでした。緑は白粉をしませんでした。その日、緑はここにこ笑いながら永井隆の出勤を見送りました。永井は弁当を忘れたことに気がついて家へ引き返します。妻の緑は玄関で泣き伏してました。永井隆は研究室で取り組んでいた放射線の障害を受けて白血病に掛っていたのです。それが別れでした。

8月9日長崎に原爆投下。久松シノはその地獄図を語る。三日目、死傷者の処置をして永井隆は家帰った。ただ二面の焼灰。台所あたりには妻の緑の黒い塊がありました。傍には十字架の付いた口サリオの鎖が残っていました。

復員した吉持東吾や古江修一、清水実医師、特攻帰りの宮園明。そして、神官西浦定吉とキネの夫婦愛。徳三は永井隆に天主堂の廃墟から聖鐘を探し出すことを提案します。ユーモアに富んだ永井隆の励まし。昭和20年11月23日、合同追悼祭での永井隆の弔辞は人々の胸を打ちます。

天主堂の廃墟から聖鐘を探し出し、杉丸太3本を組み合わせた鐘楼に吊り下げ、1945年のクリスマス夜のミサから再びこの鐘が鳴りだす。50メートルの鐘塔から落ちた鐘は煉瓦の底で割れてはいなかった。

鐘が鳴る。暁のお告げの鐘が廃墟となった天主堂から焼け野原に鳴り渡る。

永井隆は臨終します。死に顔はかすかな微笑みをたたえて静かでした。永井隆は「浦上の聖人」と呼ばれ、多くの人から驚異の目で見られていました。しかし、本人が執筆した多くの著書からもわかるように、その生き方はとても人間的で、逞しさに溢れていました。多くの人が永井隆を慕って集まって来ます。永井の恩師が「無一物処無尽蔵」の軸を持って来ます。戦災孤児の元締め愚連隊の働かずの吾、松浦渴の世間を捨吉と、娼婦の闇市のマリア・千代が永井隆を脅迫に来ます。戦災孤児論争となり、吾と捨吉は永井隆の信奉者となります。千代も永井隆の言葉に心を打たれます。また、被爆医師で永井の直弟子秋月辰一郎との不思議な因縁と対立。ユーモア溢れる二人の想いと言葉と心情はそれぞれの心根に迫るものでした。

「人類よ。戦争を計画してくれらな。原子爆弾というものが存在する以上、戦争は人類の自殺行為にしかならないのだ。戦争をやめてただ愛の掟に従って相互に助け合い、平和に生きてくれ」



水井 緑・大田みどり
彩橋みゆ



山下サチ
瀬戸千夏



久松シノ
清水奈々絵



清水 実
石山 海



西浦定吉
小池雄介



宮園 明
吉倉聖史



働かずの吾一
大久保卓朗

代表世話人(アイウエオ順)

- 片岡千鶴子(長崎純心大学学長) 齊藤寛(長崎大学学長)
- 高見三明(カトリック長崎大司教) 土山秀夫(元長崎大学学長)
- 朝長万左男(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長)
- 永井徳三郎(長崎市永井隆記念館館長)
- 野下千年(長崎県宗教者懇話会会長)
- 濱里欣一郎(NPO法人長崎如己の会理事長)
- 久松シノノ(永井隆記念国際ヒクシャ医療センター名誉センター長)
- 横瀬昭幸((財)長崎平和推進協会理事長)
- 顧問 田上富久(長崎市長) 吉原孝(長崎市議会議長)

◆スタッフ

- 作・演出/岡部耕大
- 題字/岡部耕大
- 音楽/野間 哲
- 美術/阿部 一郎
- 照明/福田恒子
- 音響/三木大樹
- 衣装/松竹衣裳
- イラスト/ともずみ花折
- 写真/山本悟正
- 舞台監督/上林英昭
- 企画・制作/岡部企画
- 制作協力/オフィスD A Y

- ◆お問い合わせ 「長崎の鐘」公演を成功させる会(アジェンダNOVAながさき内)
長崎市滑石1-23-23-704
☎095-842-1111(アクター企画内)
- ◆チケット取扱い 浜屋プレイガイド・くさの書店(西友道ノ尾店)